

12 溶岩地帯から森林ができるまでにはどのような道すじをたどるだろうか

火山の噴火によって、それまでの植物群落がすっかりなくなり、溶岩の裸地ができます。

この荒れたところは、土壌は少なく、溶岩ばかりで、すぐに木が生えるということはありません。

まず岩石の割れ目など水がたまるところに、コケや地衣類の胞子が落ちて発芽するようになります。

しだいにコケ類や地衣類が生育しはじめます。これらが枯れてくさっていくうちに腐植質を含んだ土壌ができ、水分や養分が保たれるようになります。

それとともに1年生草本の種子が風などによって運ばれ、特に日なたでやせた土壌でも強く生育する種類(キク科植物など)が生えて、草原がだんだんとしげっていきます。

ここまでの経過は、図-2のかわら屋根に草が生えることから考えられると思います。

つぎに、ヨモギやススキなどのような多年生草本が侵入してきます。多年生の植物がしげってくると、さきに生えた1年生草本は、じゅうぶん成長できなくなり、草原はススキなどの多年生の植物に占められていきます。

よくしげった多年生の植物は、根を地中にはり、土をやわらかくするとともに秋に落葉した枯れ葉が、土壌のかわきを防ぎ、植物の肥料となって、土壌はだんだんよくなります。

そうすると、鳥などによって運ばれた木の種子も発芽し生育していきます。最初に侵入する木は、イバラの類やタラノキ・ヌルデなどで、日なたでよく成長する種類です。

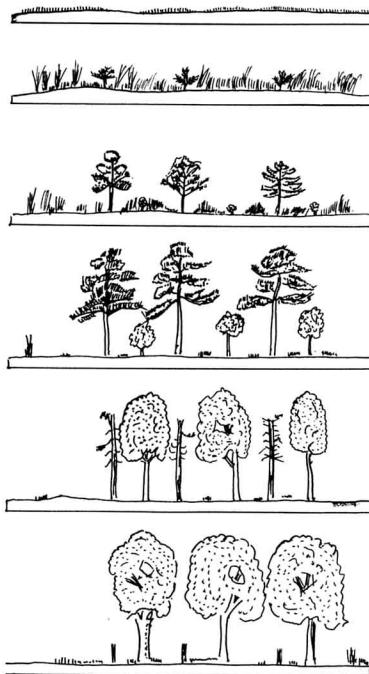


図-28 裸地から森林への
移り変わり